

揺らめく文体

— 『蜻蛉日記』 上巻の表現と心 —

柴田 まさみ

一 はじめに

女性の手による日本初の本格的な仮名文の日記である『蜻蛉日記』は、書き手である道綱母にとって、創作的挑戦の賜物であったということに、多言は要さないであろう。ましてや、彼女は歌人、いわば、韻文に秀でた人物であって、散文的な世界への進出に、それなりに苦心していたであろうことは、容易に想像される。それは、本日記の文章からも、うかがい知られるのではないだろうか。要するに、彼女という書き手が、散文なるジャンルに臨み、試行錯誤を繰り返しながら、如何にして、自己の心を表象していったのか、ということ、小考では、検討してみたいのである。

このことを論じる一方法としては、文章や文脈の構造を点検してゆくことが、挙げられよう。それは、端的にいうなら、文体論、ということになるが、この文体という語句の意味

とか、研究概念が、広大無辺の体をなしているのであった。たとえば、『国語学辞典』の「文体」の項¹は、「何をもって『文体』とするかは、人によって様々であるが」と始まるほどのだけども、同説には、続けて「多様な文体観も、文章の表現上の性格を他と対比的にとらえた特殊性を問題とする点では共通している」と述べられている。すなわち、文体という語句の概念は、個々の文章を相対的に把握することによって浮き彫りになる表現上の特色であるという理解は成り立つようである。同書では、さらに、「多様な文体観」を整顿するための「種類」として、次のように分類している。

①文字表記の面から漢文体・宣命書・変体漢文（東鑑体）・漢字仮名交り文・仮名文など。

②使用する語彙の面から和文体・漢文訓読体・和漢混淆体・候文体・雅文体（擬古文）など。

③語法の面から文語体・口語体、散文直訳体など。

④文末表現から「だ」体・「である」体・「です・ます」体・「であります」体・「でございます」体。

⑤文章の種類の中から日記体・書簡体・会話体・公文書の文体など。

⑥文章の用途の中から感想文・報告文・記録文・推薦文・宣伝文・説明文など。

⑦ジャンルの面から童話文・小説文・随想文・論説文など。

⑧調子の面から散文・韻文。

⑨修辭の面から待遇文・四六駢體など。

⑩文章の性格の面から素朴体・華麗体・簡約体・蔓衍体・雄健体・軟弱体など。

⑪時代の面から古文・現代文、上古体・中古体・近古体・王朝体・元禄体など。

⑫使用言語の面から共通語の文体と各方言の文体、日本語の文体と英語の文体。

⑬表現主体の属性から男性の文体と女性の文体、子供の文体と大人の文体、教員の文体と軍人の文体とサラリーマンの文体、九州人の文体と東北人の文体など。

⑭文学史の面から白樺派の文体と新感覺派の文体など。

⑮作家ごとの違いという面から芥川龍之介の文体、川端康成の文体、井伏鱒二の文体など。

⑯執筆時期による違いという面から初期の文体、晩年の文体など。

⑰作品ごとの特徴という面から「枕草子」の文体、「坊っちゃん」の文体、「細雪」の文体など。

以上のように、文字どおり、「多様な文体観」が認められるわけであるが、本論では、もちろん、『蜻蛉日記』の文体を考察するのであるから、⑰に該当し、また、表現主体は女性であるから⑬にも当てはまる。その主体の文体を検証するという意味では、⑮の問題もはらんでこようし、⑱のように時代的にみるならば、中古体であるともいえよう。ほかにも、①のような面からいえば、仮名文に属するし、⑤の日記体に、日次形式ではない平安日記的な文章の方法も含んでいるならば、それもまたしかりということになる。が、筆者としては、『蜻蛉日記』という作品に含まれる内面に焦点を合わせたことから、前記の分類に従うなら、⑮や⑰に接近してゆくことが求められてくると考えている。では、具体的に、如何なる術を以て、検証すべきであるか、述べることにしたい。

二 文体論の方法

これまで、文体論は、さまざまな方法や理念が提唱かつ実践されてきた。その一端を掲げるなら、まず、現行『紫式部日記』の冒頭末尾である、

おまへにも、近うさぶらふ人々、はかなき物語するを聞こしめしつ、悩ましようおはしますべかめるを、さりげなくもて隠させ給へる御有様などの、いとさらなるこ

となれど、「憂き世の慰めには、かかるおまへをこそたづねまゐるべかりけれ」とうつし心をばひきたがへ、たとしへなくよろづ忘らるるにも、かつはあやし。

という一文について述べた、秋山虔氏の、

ということは、土御門殿の優艶な雰囲気に陶醉し、われを忘れて中宮を讃歎する自己を、これに對してむつくりと頭をもたげてくる重くうれわしい自意識の座標でとらえなおそうとしているということにほかならない。いうまでもなくそのことによつて彼女の全的な感動がさしひかれるというのではない。問題は、その全的な感動と、それを不可解とする反省との緊張關係が、この段の表現をつらぬき、ここに一種独特の文体印象成り立たしめてあるということである。いいかえれば、作者のひたすらに美にさそわれる、あるいは美を発見してゆく志向と、現実に生きることの苦渋に目ざめる倫理的な志向とのせめぎあう矛盾的な人間構造が、ゆくりなくもここに総体的な表現をあげているということ、そのことは、もはや式部の日記執筆のいとなみが、主家の期待や要請による日次記であるとかないとかの次元をこえた、高度の個性的な文学創造の領域に属してしまつてあるということにほかならないだろう。

この言説が想起される。それは、引照した『紫式部日記』の一文においては、中宮彰子の敦成親王御出産を目前にした、

秋気深まる道長所領の土御門邸の景色を切り取つた美文的展開から一転、身重の中宮の周囲への配慮と、その世界に陶醉する式部という自己を、もうひとつの人格が「かつはあやし」と断じることの「緊張關係」が「一種独特の文体印象」の成立を見ていると、そしてそれが、「高度の個性的な文学創造の領域」に達していると述べられているのである。これはまさに、文章を精読することによつて明らかとなつた文体的特色であり、それは、式部の思考へとつながるといふ、貴重な提唱であろう。また、野村精一氏は、『源氏物語』の文体について、

ここに述べようとする〈源氏物語の思想と文体〉とは、おそらく、しばしば誤解されるであろうように、〈源氏物語の思想〉と〈源氏物語の文体〉とをつなぎあわせたものではない。わたくしは、ここでは、そのようなスタティックな思想や文体を取り上げようとしているのではない。これまで、われわれは、それらのことばを、あまりにも平面的のみにとらえたがゆえに、思想ということばから、直ちにあの莊嚴なアカデミックな哲学体系を連想し、また文体というとき、与えられた文章の類型を命名することしか考えていなかったようだ。だが、既に、今日〈文体〉とは、もはや単なる文章の形態・類型をさすものではなく、ある主体または精神の表現の様式をさすものと考えられている。このような〈文体〉とは、お

そらく、人間の精神の営みのことば(単一語ではない)によって秩序づけつつ表現される機能または過程を、より示すものであろう。この文体にふさわしい思想もまた、かつての如く固定的・実体的なものではありえない。精神の営みとしての〈文体〉そのものの中に、ダイナミックに包み込まれて行くようなものでなければなるまい。思うに、文学の〈思想〉とは、作品の中になる思想へまたは思想性³のことではない。ことばと共に展開して行くものこそ〈文学の思想〉というべきであらう。このようにして〈思想と文体〉は単一の命題として成立しうると思われる。

と提言される³。つまり、文体とは、執筆主体の精神的な深層からにじみ出る「思想」を「ことば」によって秩序化したものであるとし、いわば、「思想」は「ことば」をして展開する文体に、支えられる躍動感であるということであらう。筆者も、このように、『蜻蛉日記』の文体というものを、「○○体」のようなものとしてではなく、書き手のスタイルであり、それは、その魂の痕跡であることとらえてみたいのである。方法としては、先にも述べたように、文章・文脈の構造の点検という手続きを踏まえることで、検証することとする。具体的には、森岡健二氏が、『文章構成法 文章の診断と治療』の「正しい文―文の構造―」のなかで説いておられる、図解による解析法³を援用し、『蜻蛉日記』の「上巻」の内部にお

いて、自己の心の歩みが顕著な一部を抽出・分析することによって、書き手・道綱母の思考ないし思想、および、作品の内面的な性格の一端を、垣間見ることとしたい。

三 『蜻蛉日記』の心の論理

前節でも述べたように、文章や文脈の構造分析から、『蜻蛉日記』の内面に向き合いたい。さしあたり、まずは、いわゆる序文と言われるブロックから、見てゆくこととしよう。

かくありしときすぎて、世の中にいともものはかなく、
とにもかくにもつかでよにふる人ありけり。かたちとて
も人にも似ず、こころ・たましひもあるにもあらで、か
うものえうにもあらであるも、ことわりと思ひつつ、
ただ臥し起き明かし暮らすまに、世の中におほかる古
物語のはしなどを見れば、世におほかるそらごとだにあ
り、人にもあらぬ身のうへまでかき日記してめづらしき
さまにもありなむ。「天下の人のしなたかきや」と問は
むためしにもせよかし」とおぼゆるも、すぎにしとしつ
きごろのことも、おぼつかなかりければ、さてもありぬ
べきことなむおほかりける³。

序文は、三文からなる一節であるのだが、一文一文を分析する。なお、その際、解析結果を、下記のごとき図解を駆使しながら、解説していく。

《図1》第一文目

かくありしとき——すぎて
世の中に——いと——ものはかなく——よにふる——人——ありけり
ともかくにも——つかで

右のごとく、懸り承けと並立関係を整理していくと、「かくありしときすぎて」なる文節と、以下の「・・・よにふる人ありけり」なる文節には、話題のズレが生起していることが察知される。一文の内側において、「かくありしとき・・・」という執筆主体、ないしは、上巻世界に内在する時空を物語る節と、下に続く「よにふる人ありけり」との自分自身を作品の世界に設定する節とでは、内容的に落差が生じてはいまいか。換言すれば、「このようにありし時が過ぎ去って」という時間的な提示と、「ともかくにもつかずに生きている人がいた」という自己規定としての提示は、レヴェルを異にしているということである。このように、『蜻蛉日記』には、文章・文脈的な構造上、不整な表現が少なくない。たとえば、夙くに、柿本奨氏が、『蜻蛉日記』の文章について、

心理的にこみいった述懐の表現になると、この作者は力不足を露呈しがちになるようであり、調子の高い文章とか、きらりと光った描写とか、練りに練った表現とかは、あまり期待できないが、言いたいことを丸出しにせず、ことばの裏にひそめるといった含蓄ある表現もして

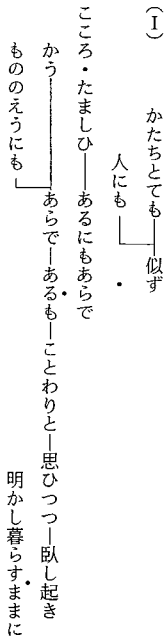
いて、文章に奥行きを持たせている所もある。しかし、そんなことよりも生活からにじみ出たなまなましい感情を、ぶつけるように表現した、いうならば、即感情的な文章を書いたところに、この作者の散文の才の最も特徴的なものが窺えるといえるだろう。われわれの目から見て、文章上の欠点と言いたいものも、いろいろある。読者を意識していて、読まれる時の用意をしている趣も窺える一方、文章の推敲が足りていないと思われるようなところもある。

と述べておられるが、たいへん示唆的な見方である。同氏は、文章作法上、不適切であると思われる部分が指摘されるが、それは、日常に横溢するリアルな感情を表現した「即感情的な文章」と述べられるも、その反面、読まれる時点に対する意識が不足しているという欠陥があるとも言われる。こうしたことは、先に述べてきたような、序文の第一文目に生じた、文章的なレヴェルの亀裂ともいえるべき現象にも類することがらであろう。そうした状況を可視化すると同時に、それが、この日記作品、延いては、書き手の如何なる情況を物語っているのかを論じることが、本考の目するところであるわけだ。仮に、序文第一文目が、「かくありし時すぐして」と始発していたとしたら、すなわち、こんな風に昔時をすぐして、中途半端にゆらゆらと生きていた人がいた、というように展開していたらば、何ら問題はあるまい。けれども、先述したよ

うに、前後の節で、主語のレヴェルが相違しているのであった。この一因を推量するには、「かくありしときすぎて」という言い方にヒントがあると思われる。要するに、昔日をすごすという能動的な言辞では、ひたすらその時空を生きてきたという、ある種の前向きな印象を与えかねないが、昔日がすぎるといふ受動的・傍観的な言とすることによって、書き手は、その心の無為を表現したのではないかと。ゆえに、結果として、文章作法の面からいえば、欠陥として見る以外にないが、それが、われわれに、独特な陰影をもたらしているのではないだろうか。

では、一文目の分析はこのあたりにして、解析の手を、第二文目にすすめると、次のようになろう。(なお、第二文目の解析は、「(I) かたちとても人にも似ず」ただ臥し起き明かし暮らすまに、「(II) 世の中におほかる古物語のはしなどを見れば、世におほかるそらごとだにあり、「(III) 人にもあらぬ身のうへまでかき日記してめづらしきさまにもありなむ、」というように分割して、行ないたい。)

《図2》第二文目



(II)

世の中に——おほかる——古物語のはしなどを——見れば——

世に——おほかる——そらごとだに——あり

(III)

人にもあらぬ身の上まで——かき日記して——めづらしきさまにも——ありなむ

かなり長い一文であるため、まず、大きなつながり——I・II・IIIの關係性からみてゆくこととしたい。(I)の「明かし暮らすまに」は(III)の「かき日記して」なる表現に続いてゆく。(II)は、当該文に組み込まれた挿入句である。書き手が志向した理路を裏づけるなら、はじめに「よにふる

人ありけり」を延伸するかのようなかたちで、自己の境涯(II)を物語り、さらにその文勢を保持して、(III)を書きすすめればいいものを、その自分自身にまつわるリアリズムを日記に仕立ててゆくのだということがらの、逆説の発想として、「古物語」や「そらごと」といったキーワードが、頭をもたげてきてしまったため、(II)を、はさみこみの⁸⁾に、叙述してゆくことになり、そして、本来、述懐したかった(III)に復帰していった、という推測がなされるであろう。それは、書き手の思考の痕跡といってもいいし、柿本氏のことばを拝借すれば「即感情的な文章」であると評するにふさわしい一文であるのだが、とはいえ、この一文は、文章上の修辭的な面からいえば、稚拙であるというべきであろう。

文構造は図示した通りであるが、「(身の上まで)書き」と

「日記して」は重複している。(但し、もし、当時の文学的な概念として、「書く」という書記行為と、「日記(す)」という日記に仕立てるといことがらが、全く次元を異にするものとして弁別されていたとしたら、重複というには早計であるのだが。)それはそれとして、もっとも、明確なのは、「日記して」と「めづらしきさまにもありなむ」は、語法的に、ズレてしまっている、ということである。それゆえに、点線であつながら示してある。いわば、文章として接続していても、意味的な点からみれば、悉皆、接続しない表現なのである。要するに、(他人でもない(おのが)身の上まで書き、日記するのはきつと珍しいありさまであろう)などとなるわけであつて、傍線を付したような表現に類する言葉に改めないう限りは、隙間があいたままになつてしまふのである。しかしながら、このような文章の進りは、書き手の思考の活動や作品の思想の結晶であり、悪文的な表現であるにせよ、そうしたテクストを丁寧に読み解くことで、その裏側に内在する、書き手の脈動の足跡をかいま見ることが可能であろう。

〈図3〉第三文目

天下の人のしな一たかきやと一問はむためしにも一せよかしと一おぼゆるも
すきにしとしつきごろのこともおぼつかかりければ「おほかりける
さてもありぬべきことなむ」

そして、第三文目について。諸註、先の「めづらしきさま

にもありなむ」と「天下の人のしなたかきやと問はむためしにもせよかし」の間に読点を打ち、二文目と三文目を、同等のレベルのものとしてとらえておられがちだが、再検討が俟たれよう。というのも、両者は、ただちに続けるべき次元の言説ではなく、一文目は(日記執筆の営為に対する評言)であり、二文目は(執筆した日記に対する評言)であるわけで、それぞれ、次元を分かつ話題だからである。つまり、「めづらしきさまにもありなむ」までは、虚飾に満ち満ちた世界を語るのではなく、わが身に起きた事件を「日記」として物語るのは、稀なるものであらうという、執筆行為に際しての表明であるのに対し、「天下の人のしなたかきや」以降は、ひとまず完成をみた「日記」に対しての自己評価だということである。このような文脈的な構造を明らかにすることも、不可欠であるが、それはさておき、問題として提起したいのは、文章作法上、「おぼゆるも」を承ける文節が介在するかということ、そして、高貴な夫人の暮らしぶりは如何にどの問の答にでもしてごらんないよ、といった内容をうける「おぼゆるも」から、文脈的な顔色が変転することである。

第一に、「おぼゆるも」を承ける文節が見当たらないという問題に関しては、「おほかりける」が承けるのではないか、と思われられるかもしれないが、これでは言葉足らずである。「おぼゆるも」が「おほかりける」という文節に連なるとすれば、(貴婦人の暮らしを知る手がかりとせよ、と思われ

けど、なにぶん恩讐は彼方という調子で緩慢な叙述内容が多くなってしまったから、できれば秘匿しておきたいわどどという具合に、傍線を付したような表現がない限りは、「おぼゆるも」をしかと承けとめることは不可能なのである。

それから、「おぼゆるも」以前は、創作者としての自信がみなぎるような内容であったにもかかわらず、それ以後は、「も」という逆接表現を皮切りにして、経過した歳月の記憶が曖昧であるため、贅言が多くなってしまったことだ、とあるとおり、執筆現在から上巻執筆の時空の、自己の意識の情況を想起し、叙述不要のことがらが多くなってしまった、と終止している第二の問題。この振じれてしまった文章を、如何にとらえるべきか、ということこそ、『蜻蛉日記』という作品の内的理解のかなめであろう。この問題については、『天下の人のしなたかきや』と問はむためしにもせよかし」という表現が、以下の言辞が生じる契機になった、と考えるのが穩当であろう。すなわち、第一文目および第二文目の前半で、自己——本日記の主体——の存在性に言及し、その地平から導かれるようにして、古物語における虚言と日記の現実味について言い表した時点で、執筆主体の情動は、最高潮に達して、『天下の人の品高きや』と問はむためしにもせよかし」と叙された日記の書評ともいべき言を表明。ところが、このことを書き記す頃には、日記執筆の過程やその内容が想い起こされ、先に指摘したとおりの屈折が生起してしまっ

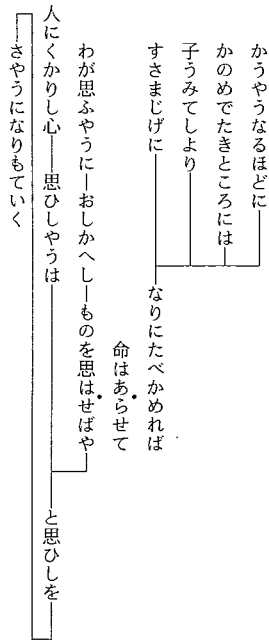
た、と推察される。また、そうした心的屈折が、「おぼゆるも」を支えきれない「おほかりける」という表現で、筆が擱かれていふことにかかわっている可能性は、否定できまい。仮に、草稿はあったとしても、道綱母という女性が、自分自身心の痕跡を、なるべく感情をそのままにして刻みつけてゆくことが、『蜻蛉日記』の志向する世界であるとするならば、それゆえに、未整備的な文体が立ち現われてくることも、理解できなくはないだろう。それは、見方を変えていえば、道綱母という書き手の情動が横溢するようなときに、感情むき出しの屈折した文体が顔を出す、ということではないだろうか。

その一端を示すなら、あの町の小路に住む兼家の通いし女の淪落を書いた記事が、好例であると思われる。この記述の、とくに、ア・イの二文に注目して、分析することとしたい。

アかうやうなるほどに、かのめでたきところには、子うみてしより、すさまじげになりたてばかめれば、人にくかりし心、思ひしやうは、「命はあらせて、わが思ふやうに、おしかへし、ものを思はせばや」と思ひしを、さやうになりもていく。はてはうみののしりし子さへ死ぬるものか。孫王の、ひがみたりし親王の落し胤なり。いふかたなくわろきことかぎりなし。イただ、「このごろの知らぬ人の、もてさわぎつるに、かかりてありつるを、にはかにかくなりぬれば、如何なるこちかはしけ

む、わが思ふにはいまい少しうちまさりて嘆くらむ」と思ふに、いまだ胸はあきたる。いまだ例のところにもうち
 払ひてなど聞く。されど、ここには、例のほどにぞ通ふ
 めれば、ともすれば心づきなうのみ思ふほどに、ここな
 る人、片言などするほどになりてぞある。「出づ」とて
 は、かならず「いま来むよ」といふも、聞きもたりて、
 まねびありく。

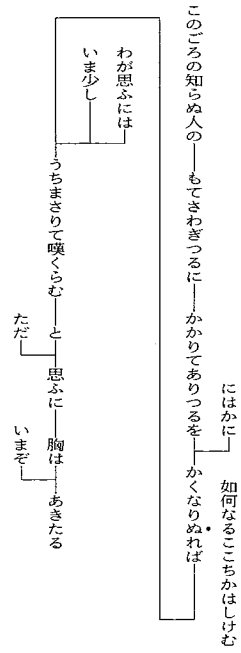
《図3》ア文の解析



まず、ア文を分析すると、「かのためでたきところには」と
 「子うみてしより」は、「なりたたべかめれば」なる述部に懸る
 ことがわかる。意を解すならば、へかの寵愛の甚だしいとこ
 ろにおいては、子を産んでから、荒涼とした感じに、なつて
 しまったようなので」といったところである。この傍線部分
 を請け負う文節が、内容的には「私は満足である」といった

ことからであれば、文章上、何ら問題はないけれども、文脈
 は「人にくかりし心、思ひしやうは、『命はあらせて、わが
 思ふやうに、おしかへし、ものを思はせばや』と思ひしを、
 さやうになりもていく」とあるように、振れてしまうのであつ
 た。すなわち、へ私の憎らしい心が、思ったことには、命あ
 るままにさせて、私の思い悩んでいるように、反対に、思い
 悩ませたい、と思つたところ、町の女は、そのようになつて
 ゆく」といった、積年の憎悪が堰を切つたように、溢れだす
 ような文脈と化しているわけだが、それは同時に、例の傍線
 部分「なりたたべかめれば」を、ただちに承けてはいないこと
 を意味している。さしあたり、こうした現象の内実を、どの
 ようにとらえるかが、問題となつてくると思われる。展開と
 するならば、町の小路の女の、出産による零落に対して感ず
 るところも述べぬままに、醜悪なおのが心をなじりつつも、
 兼家不訪の日々に、ずっと抱き念じていた思いが、蘇つてき
 てしまったのであろう。その結果、こうした辻褃の合わぬ文
 章が生成され、一種独特の文体が立ち現われてきたのだと考
 えられる。続くイ文も、その構成を分解すると、

《図4》イ文の解析



という具合となる。一文が複雑な展開であるから、上述のように、解釈しておく〈近頃の向こうの様子を知らないあの人(兼家)が、もてはやして、それに甘んじていたのに、突然こうなってしまったので——如何なる心地でいたのかしら——私が思い悩むよりも少しまさって嘆いているのだろう、と思うと、今こそ清々している〉といったところである。諸註「如何なるこちかはしけむ」に句点を打っているが、「けむ」という助動詞の介在より見れば、執筆現在からの評言としての挿入句ではなかったか、と思われる。そして、「かくなりぬれば」は「嘆くらむ」に懸るのだが、兼家の寵を一身に集めていた女は、このように落ちぶれてしまっただけならば、私——道綱母が想像する以上に慨嘆しているだろうとだけいえば、文章上、それほど複雑化はしなかったかもしれないが、「如何なるこちかはしけむ」という執筆時からの——如何なる心地がしただろうか、きつと「如何なる」どこ

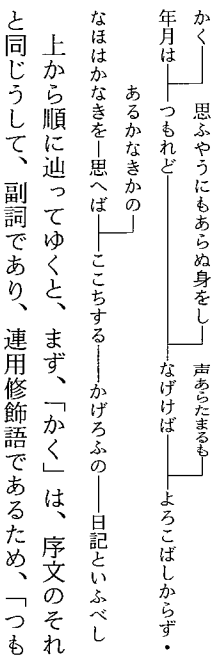
ろの話ではなかったであろう——という所感が入り込むことによって、道綱母という女性の心の揺らめきが表現されているとみていいのではないだろうか。もとより、文章作法の上では、不整であるし、拙いものと言わざるを得ない。けれども、揺らめく心を、整備された文体で物語ることは、すくなくとも、道綱母の選択肢には無かったのではないかと推測される。

最後に、『蜻蛉日記』と称することの、由来にもまつわる跋文について、いささか見えておくこととしたい。

かく年月はつもれど、思ふやうにもあらぬ身をしなげけば、声あらたまるもよるこばしからず、なほものはかなきを思へば、あるかなきかのこちするかげろうふ日記というべし。

右に掲出した一文が、上巻の締め括りとしての、いわゆる、跋文である。これを、前例にならって図解とするならば、次のとおりである。

《図5》



れど」という述部に懸る。その主語は、「年月は」である。さらに、「つもれど」は、歳月は積もるのに嘆かれる、という道筋を形成する語句であるから、「なげけば」に懸ってゆく。もちろん、その「なげけば」の客体（目的部）は、「思ふやうにもあらぬ身をし」である。そして、尽きない嘆息ゆえに、新年を迎えるのも嬉々とできることではないというように、「なげけば」は「よろこばしからず」に続くのであった。本来的には、ここで、文を終止させてもいいのかもしれないが、慨嘆から導かれるような感覚で、常無き自分自身に筆がスライドしていったのだと思しい。すなわち、「よろこばしからず」から「なほはかなき」へと、ことばを重ね合わせるようになっていのではないだろうか。さらに、書き手に沈着した「はかなし」という想念から、本日記の主題・ネーミングにかかわる文節へと、切れることなく展開していることがわかる。「なほはかなきを思へば、あるかなきかのこちす」でも、文章上問題はなけれども、書き手は、「あるかなきかのこちするかげろふの」というように、喻的な表現になるよう、筆を走らせていたのであろう。その意図は、如何にして生まれたのか、今となっては、知る手がかりもないのだが、「よろこばしからず」では抑えることのできない迸る想いが、「なほ」以下を書き連ねさせ、幸福常ならざるわが身を「あるかなきかのこち」と言い表し、そしてそれが、「かげろふ」という形容を引き出して、そうし

た「日記」であると言わしめたことは、この滔々とした文体が、物語っているように思われる。「かげろふの日記」という語句が、どのようにして生まれたのか、という理由をさぐるひとつのヒントが、一文の文体に秘められているといってもいいかもしれない。

以上、粗削りではあるものの、一文の文章を解析することで立ち現われてくる日記の心のようなことがらを述べてきた。解きほぐすように分析し、ビジュアル化することによって、文章のリズムが、見えやすくなるのではないだろうか。そのような息遣いに耳を傾けることによって、日記に込められた心を、比較的、つぶさにとらえられるのではないかと考える次第である。

四 おわりに

かなり試論めいてはいるが、多様な観点をはらんでいる「文体」という語句の概念を、いちおう明らかにした上で、秋山虔氏と野村精一氏の両論にアイディアを得て、森岡健二氏の「正しい文―文の構造―」等をヒントにしながら、『蜻蛉日記』の文章に表れた心の論理について述べてきた。もとよりそれは、『蜻蛉日記』の文章が、破綻に満ちたものであり、文章作法上、拙い部分ばかりである、などと批判したいわけではない。むしろ、わたしたちが、スタンダードであると認識している文構造あるいは文体に対する概念と、作品の

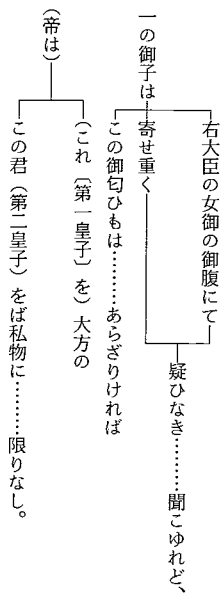
それらを、比較することによって立ち現われてくる、『蜻蛉日記』オリジナルの心の論理を、より明確なかたちで示そうとしたのである。たしかに、決して発表年次の新しくはない秋山・野村両氏の研究理論を援用するのは如何なものか、とか、原手記本文からの改竄が少なくない可能性も指摘される、本文異同の著しい『蜻蛉日記』の文章を基盤にしながら、書き手の思考や精神といった内面的な部分を論ずることは果たして有効か、といった見方もあるだろう。しかしながら、前者については、こう考えるべきではないだろうか。すなわち、小考における文章の構造解析と検証によれば、文体と心のかかりについては、おそらく否定できない。一文一文の解析と、その結果の分析という手続きを踏んだ時に、一概に「古いモノ」として排斥することはできないか、ということが、改めて諒解されよう。そして、後者にかんしては、窺われたように、『蜻蛉日記』の文章には、主語の交錯や挿入句の混入、懸り承けのままならない部分があるなどの、ある程度の傾向性が、共通しており、日記や書き手の内的な文体論的検証に耐えられないレヴェルの本文異同は、ほとんど生起してないとも考えられるため、これも、問題視するほどのことではないだろう。いずれにしても、今後は、そうした揺らめくような、文章作法上からいえば、不整な文体が、『蜻蛉日記』の内面世界——心を醸成しているのではないか、という観点から、本作品の様々な場面と対峙することとしたい。

〔注〕

- (1) 国語学会編『国語学大辞典』(一九九三・東京堂出版)。「文体」の項は、中村明氏が担当しておられるが、その一端を引用しておこう。「文章を単なる文字連続ではない表現行動の軌跡と見なし、その言語作品という記号的な場において書き手と読み手の個性がぶつかり合う動的な現象の中で文体を捉えようとした点をこの定義の特色であるとし、作品の言語的特徴がすべて文体の特徴であるとは限らず、「動力となった」すなわち、作品の場で魂の響き合いの起こったものだけが文体の形成に働く」と説明を補足している。そして、真正な意味での文体は、読者のスタイルが掴み取った言語面での作者のスタイルであり、その背後に感じ取った人間の生き方であると結論づけた。(なお「スタイル」とは、文章上のそれだけではなく、芸術の様式や服装の型も指し示すような広義を抱懐する語句——筆者註)
- (2) 『紫式部日記』の本文引用は、小谷野純一氏訳注『原文&現代語訳シリーズ紫式部日記』(二〇〇七・笠間書院)に拠る。
- (3) 「紫式部の思考と文体」(『源氏物語の世界』一九六四・東大出版会)所収)に拠る。
- (4) 「源氏物語の思想と文体」(鈴木一雄氏編『別冊解釈と鑑賞 源氏物語 文体論・表現論』(一九八二・至文堂)所収)に拠る。
- (5) 森岡健一氏は、『文章構成法 文章の診断と治療』(一九六三・至文堂)の「正しい文・文の構造」の中で、以下のような「文の図解」を試みられている。たとえば、「山に秋草がいっぱい咲いている」という文を、



というように分析している。「山に」「秋草が」「いっばい」という単語が、「咲いている」という述語に懸るという意味合いの図式である。なお、図説中に用いている中黒は、文節と文節が並立することを意味している。構文の分析に、こうした方法を、比較的夙くに採用した平安文学の現代註として、島津久基氏の『対訳源氏物語講話』(一九三二・中興館)が挙げられる。その一例を、ここに引用することとしたい。氏は、『源氏物語』「桐壺巻」における「一の御子は、右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、疑ひなき儲けの君と、世にもてかしづききこゆれど、この御にはひには並びたまふもあらざりければ、おほかたのやむごとなき御思ひにて、この君をば、私物に思ほしかしづきたまふこと限りなし」という一文(ここの本文引用は、石田謙二・清水好子氏『源氏物語』へ一九七六・新潮社)に拠る)について、



という具合に図示しておられる。
 (6) 『蜻蛉日記』の本文引用は、宮内庁書陵部蔵『かげろふ日記』に拠るが、わたくしに改めた箇所がある。なお、引用に際

して、直截的には、『笠間影印叢刊68』(一九八八・笠間書院)を用いた。

(7) 『蜻蛉日記全注釈』(一九六六・角川書店)に拠る。

(8) ちなみに、「はさみこみ」なる用語は、元々は、佐伯梅友氏が、『上代国語法研究』(一九六六・大東文化大学東洋研究所)等で提唱されたものである。

(9) 小考は、二〇一二年十二月十五日に行われた、日記文学会第六十三回大会において発表した内容を基盤にしているが、その際、席上から様々な意見を頂戴した。ここに明記し、御礼申し上げる次第である。